

中野知律 『プルーストと創造の時間』

加藤, 靖恵
名古屋大学大学院文学研究科 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1430744>

出版情報 : Stella. 32, pp.69-76, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

《書評》

中野知律『プルーストと創造の時間』

加藤靖恵

1970年代から80年代にかけて、フランスにおけるプルーストの草稿研究を日本人研究者が牽引した時代があった。吉川一義・吉田城の両名によって幕を開けたこの「プルースト日本学派」黄金時代の集大成と言うべき、輝かしくも重厚な成果こそが、1989年にパリ4大学に提出された中野知律の博士論文『「逃げ去る女」から「消え去ったアルベルチヌ」へ』¹⁾であった。

『失われた時を求めて』のダイナミックな増殖過程で生み出されたヒロイン、アルベルチヌの物語形成の解明については、とりわけて日本人研究者の貢献が大きい。中野は先行研究の仮説と根拠資料のひとつひとつを丁寧に再検討したうえで、それまで研究者が手をつけかねていた資料、フランス国立図書館が整理分類できないまま箱に入れていた種々雑多な草稿の大量の断片をも調査、用紙や筆跡の書誌学的分析をし、小説主題の生成的変遷にかんする独自の論を確立するための補強材料とした。中心に論じられているのは、死後出版された巻のうち『消え去ったアルベルチヌ』(当初プルーストは『逃げ去る女』という題を考えていた)であるが、この巻こそが論文受理の2年前にプルースト研究を震撼させる事件の発端となったのだ。それまで存在が知られていなかったタイプ原稿、アルベルチヌの死の場面をはじめ、数多くの重要な変更が施された原稿(とりわけ有名なベニスの挿話を含む後半部が削除され、「消え去ったアルベルチヌ、完」と作家の直筆で書き込まれた原稿)が出版されたのだ。プルーストは最終3巻にかんして全く違った構想を抱いていたが、死によってそれが実現されなかったという見解をめぐり喧々諤々の論争が起こった。このタイプ原稿以外には決定的証拠のないまま、議論は決着を見ずに終わるが、そんな喧噪のなかで淡々と、入手可能な資料を漏れなく綿密に分析し、テキスト変遷の道筋を示した中野論文は特異な存在感を示し、しばしば引用の対象となったのである。

この「事件」は大きな問題提起となった。最終稿を神聖視する伝統的な見方に対し、それさえもが無限に生起し続けるエクリチュールの一段階にすぎぬというのが80年代以降の生成研究の基本概念だが、印刷・刊行テキストにまつわる神話を徹底的に突き崩したのが、プルーストが最後に手を入れたとされる『消え去ったアルベルチヌ』のタイプ原稿だったからである。同巻の研究に取り組むということは、エクリチュールの問題、テキストの概念への根本的な見直しに関わることである。中野論文が日仏の学会に大きな衝撃を与え、プルースト草稿研究の権威であり辛口で知られたベルナル・ブランをして「生成批評の専門家の必読文献」²⁾と言わしめたのは、単なる新資料の発見や、日本人研究者特有の緻密な分析だけが理由ではない。アルベルチヌの物語の変遷を細かく辿った同論最終部で、中野は視野を大きく広げ、プルースト美学の形成、またそのエクリチュールの特質について見解を述べ、さらには文学テキストの本質や、作家が書き終えることの意味について、生成研究のみならず文学研究一般にかかわる根本的な問いも投げかけたからである。

博士論文以後の中野の研究は2つの方向を示す。まずひとつは、最終部の考察を発展させ、プルーストの文学的姿勢が形成された時代背景や文学的潮流を徹底的に解明すべく、数多くの論文を世に問い、また国際学会での発表を重ねた。いっぽう草稿検証の延長上でも新たな功績がある。クリステヴァ『プルースト、感じられる時』の日本語訳(1998年刊)では、プルーストのラスキン翻訳を思わせるような膨大な訳注によって、時として草稿さえをも自由奔放に利用するクリステヴァの手法を冷静に批評し、生成研究の第一人者としての立場を示している³⁾。さらに2008年にフランス人研究者と共同で刊行したカイエ54の校訂版は大きな評価をえた⁴⁾。

本書『プルーストと創造の時間』は第一の方向を集大成したものである⁵⁾(後書きには本書が博士論文で深めた「作家の創作実践の検証と対をなす」と明記されている)。しかし前述のように、『失われた時を求めて』生成の最も劇的な段階をつぶさに検証した実績があったからこそ、エクリチュールの問題をさらに大きな枠でとらえ、文学の概念の根幹に迫りえたことは疑えまい。アルベルチヌ草稿にかんする細かい考察は取り入れられていないが、本書は未完の小説『ジャン・サントゥイユ』、『失われた時を求めて』草稿、様々な論説や書簡も射程に入れた大著であり、長く生成研究に携わってきた著者ならではの圧倒

的成果である。

作家はいかにして作品を生み出すのか——。サルトルの自伝的小説『言葉』が「読むこと」「書くこと」の2部から成るように、読書によって培われた素養を土台に、人生の体験を題材として執筆にかかるという構図がごく当たり前に受け入れられがちである。しかし「読むこと」「書くこと」「生きること」の3者の均衡が激しく変動したのが19世紀後半のフランス文学の状況だったことが、序章、次いで第1部「文学の位置——時代といかに闘うか」で論じられる。文学教養が作家誕生の大前提とされていた伝統に反し、レアリスム文学は作家自身の人生こそが作品の題材であるという立場をとった。書くことにおける読書体験の軽視傾向が増長されたのは、普仏戦争後の大幅な教育改革による古典人文教養の否定に起因すること、また文学教育の民衆化・大衆化により、教養や能力の欠如にもかかわらず「書く病」にとりつかれた作家のインフレを引き起こしたこと、これらがフランスの世紀末の特徴として提示される。これに危惧を覚えたランソンらがさらなる改革を模索した経緯も述べられている。

第3共和制下の教育改革による文学の位置変動や、そのイデオロギ的背景については、すでにアントワヌ・コンパニョン『文芸の第3共和制——フローベールからプルーストまで』が論じている⁶⁾。だが、副題にある2作家に最終部を割いてはいるものの、歴史学的な検証に力点を置くあまり、同時代情勢が作家たちのエクリチュールに及ぼした影響についての考察は不十分との印象を与える。これとは逆に中野は、実に数多くの作品をとりあげ、19世紀後半のフランス文学における物書き登場人物の変遷を見事に辿りなおす。特に興味深いのは、『ジャン・サントゥイユ』草稿が熱狂的にペンを走らせる主人公を描いているのにたいし、生成途上の『失われた時を求めて』、殊に有名な冒頭部では、ベッドでまどろむ語り手が手にするのが「新聞」（最初の構想では語り手が自分の論考が掲載された『フィガロ』を手に取る場面が冒頭におかれる）から建築考古学概論へ、最後に実在の歴史書へと次々と置き換えられることにより、「執筆中の主人公」の姿が排除されていくという指摘であろう。『ジャン・サントゥイユ』草稿は、約10年後に書き始められる小説の補助資料と考えられがちだが、これを自立した作品とみなし、『失われた時を求めて』との差異に当時の作家たちを取り巻く文学状況の変容を読みとろうという着眼は、新鮮にして説得的である。

続いて、『失われた時を求めて』における作家誕生の主題に関連して、2人の重要な作家がとりあげられる。教養小説の古典『ヴィルヘルム・マイスター』を著したゲーテ、そしてサント＝ブーヴである。前者については「教養小説」にまつわる独仏の用語と概念の変遷を追い、ゲーテおよびそれに倣ったフランス作家たちの作品において、書物教養がどのような役割をもつものとして描かれているかを検証する。その上で若きプルーストがこの大著をどのように受容したかを示す。ラスキンについては、彼が書物で得た知識を通してのみ美を鑑賞する態度を貫きながらも、「知っているもの」ではなく「目に見えるもの」を描こうとしたターナー独自のリアリズムを擁護し続けた点に触れて、プルーストがその矛盾を厳しく糾弾したことが指摘される。このラスキンの姿勢こそプルーストが「偶像崇拜」と名付けるものだが、その概念は多くの研究者が当然のごとく用いているものの、実は複雑で明確な定義を与えることが困難である。中野はこの点について、『アミアンの聖書』と『胡麻と百合』序文、『ジャン・サントウイユ』を経て『失われた時を求めて』で展開されるプルースト独自の読書論を分析しつつ考察を深めている。

第Ⅱ部『小説の可能性』は、第Ⅰ部で浮き彫りにされた問題点を中心に、プルーストと同時代の作家の創作活動や言説を論じ、『失われた時を求めて』の美学的背景をさらに明らかにする。「長い間私は早くから床についたものだった」で始まる冒頭部はプルーストの世界を集約する独自の場面設定だと思われがちだが、極めて類似した描写がゲールモンの『シクスティヌ——頭脳生活の小説』(1890)、ジッドの『アンドレ・ワルテルの手記』(1890)、『パリュード』(1895)にも存在すること(ただし読む主人公と書く主人公という差異がある)、同じくこの冒頭部に登場する枕頭の手紙として『フランソワ1世とカール5世の抗争』(1875)が選択されたことに関する当時の社会・学校教育を取り巻く状況、さらには「就寝の悲劇」において、母親が息子に読んできかせる本の作者ジョルジュ・サンドが新世代の作家たちからは古い「ロマネスクな小説」を体現する存在だったこと等々、これまでほとんど指摘されていない事実が紹介されている。デュミュールの『アルベール』(1890)の一章「大いなる^{ズット}Zut」と、「コンブレ」のモンジュヴァンの沼の挿話の相似も説得的である。中野はこうした事例を他の研究者のように単なる間テキスト性として片付けず、あくまでも言葉の問題や「書く」行為にたいする同時代作家たちの共通項を解明すること

を目指しているのである。

第III部「近代批評と小説——『サント＝ブーヴに逆らって』の射程」は、プルーストの文学批評にかんする考察であるとともに、本格的なサント＝ブーヴ論となっている。19世紀の文壇で大きな位置を占めたこの批評家は、周知のように文学作品の読解において作者の伝記的事実を最重要と見なした。これに反旗を翻したプルーストが、フィクションの形をとる批評として1908年に書き始めたのが『失われた時を求めて』の原型であり、構想の変化にもかかわらず先人への揶揄は小説の至るところに散見する。中野はプルースト研究者が陥りやすい2つの誤謬を正す。まず、未刊にとどまった『サント＝ブーヴに逆らって』が極めて挑発的な独創性を秘めていたという幻想にかんし、批評家生誕百周年(1904年)の段階ですでに彼の方法が行き過ぎであるという見方が広まっていた事実を、当時の数多くの言説をとおして証明する(したがってプルーストはこの点にかんしては、むしろ同時代の風潮に倣っていたといえる)。つぎに、『失われた時を求めて』はサント＝ブーヴの全否定の上に成立していると考えられがちだが、実際にはパロディーとも呼びうる仕掛けが随所にちりばめられているという第3章の指摘も見事である(この事実を中野が口頭発表で示した国際学会に書評者はたまたま居合わせたか、会場全体が息をのんだような緊張感に包まれ、最終日の総括をしたアントワーヌ・コンパニオンが彼女の名を真っ先に口にしながら印象的だった)。取り上げられているのは、主人公が作家という天職に目覚めていく契機となる重要な場面、『サント＝ブーヴ』草稿における朝の母との会話、「コンプレー」のマルタンヴィユの鐘塔の挿話、そして『見出された時』で語り手がフランソワーズの助けを借りながら執筆する場面である。「虫食い」だらけのノートに紙片を「ピンで留めながら」書物を「衣服のように」「築き上げる」というあまりにも有名な比喩は、プルーストも目を通していた可能性の高いトゥルバ『サント＝ブーヴの最後の秘書の回想』(1890)によれば、まさに批評家が好んで用いた語彙の集積であること、また地平線上に姿をみせる「鐘塔」が批評家の論考のなかで、創造者たる作家が形にすることを旨とする作品の構想の隠喩として用いられていることなど、いずれも驚嘆に値する発見である。

さらにサント＝ブーヴが「生成批評の元祖」であるという見解も示唆的である。彼は単に作家の伝記的逸話にとどまらず、作品制作に至るまでのすべての

知的活動を丹念に再現することを使命としたという。後にランソンは批評家がまさに「作品の起源＝生成」^{ジュネーズ}を理解していたと評価した。生成研究とは、バルトの「作者の死」宣言以前の実証主義への回帰ではなく、「作者」の意図に束縛されず、無限の読みの可能性、果てしない変容の潜在性を秘めた新しいテキスト解釈である、そう主張する70年代以降の生成研究者たちにとって、前世紀的文学批評の体現者サント＝ブーヴが草稿の重要性を最初に認識した批評家のひとりだったのは何とも皮肉なことである。

死の数カ月前の書簡によると、プルースト自身が「誰でも自分の草稿を閲覧できるようになり、決定稿と比較し、そこから自分の仕事のやり方や考えの発展等に関して常に誤って推測されるようになる」ことを強く危惧していた。しかしながら草稿を含めたすべての伝記的資料を基に、作品創造の諸段階を創作者の実人生のなかに辿るサント＝ブーヴの姿勢は、『ジャン・サントゥイユ』以降、作品誕生の瞬間に至るまでの創作者の生の軌跡を主題とし続けたプルースト自身の小説美学とも呼応している。サント＝ブーヴの批評は、単にプルーストが目指す文学理念の反面教師であると簡単に説明されがちだが、実際には『失われた時を求めて』という「生成小説」の誕生に深く関与していることが明かされるのである。

本書の最終部は、博士論文での検証をとり入れつつ、これまでの論を基盤にいくつかの重要な挿話の生成過程を詳細に分析して圧巻。プルーストの生成研究の今後を考える上でも示唆的である。近年、コンピュータ・ソフトの開発やデジタル画像の技術進歩により、研究の物質的環境は格段に向上した。フランス国立図書館のサイトでは、プルーストの75冊の草稿ノートをはじめ主要な資料にかんして、マイクロフィルムは言わずもがな、時には実物よりも鮮明な画像を自由に閲覧・ダウンロードすることができる。草稿ノートについては従来研究成果を導入し、全ページを極めて忠実な筆写とカラーファクシミリで再現した校訂版がすでに4冊出版されている。しかしながら高性能な道具立ては揃ったものの、使い手は減る一方なのが今日の状況だ。プルースト研究の主流は、コンパニオンを筆頭に文学作品を歴史・社会的事象のひとつと捉え、当時の新聞・雑誌、その他あらゆる言説を掘り起こしてテキスト誕生の経緯を多角的に捉える手法へと移行し、今や若い日本人研究者たちが中心となって活動している。いっぽう草稿研究に身を投じる新世代の研究者は世界的に見てもごく

少数である。本書は、テキストに近視的に向かい合う生成研究がエクリチュールをとりまくすべての状況を射程に入れつつ、文学を越境する研究に開かれていること、またむしろ後者のマクロな視野の対象となる諸現象が、テキスト生成の諸段階における文体や語彙等の一見瑣末な変化にダイナミックに集約されている可能性の実例を示している。

本書を通読して感じられるのは、著者自身が述べているように、プルーストが生きた時代の文化的状況と戦後日本のそれが酷似している点である。普仏戦争の敗北により国の威信が揺らぐ危機的状況のなかで、まず槍玉に挙げられたのが教育問題、特に教養・文学教育だった。日本でも、かつてはごく少数のエリートに限定されていたにせよ、高度な語学力と文学素養をもつ知識人を養成した旧制高校・大学などの教育制度が戦後に廃止され、以後も経済的危機のたびに教育改革が進められ、教養課程は解体され、文系学部は縮小される一方であり、今日では「フランス文学」という名称の専攻をもつ大学は全国でも数えるほどだ。これまで必読とされていた文学史上の名作をほとんど読みもせず文学部に入学する学生が年々増加する一方、誰もがインターネットのサイトやブログを通して気軽に自作のテキストを発信できる時代、まさにフランス世紀末と同じく「誰もが書ける時代、各々が言葉を発する人の増殖の時代」が到来した。

なぜ日本人はプルーストを好むのか——フランスでそう問われるたびに筆者が言及してきたのが、1992年の『ビュルタン・マルセル・プルースト』に中野が寄稿した「現代日本におけるマルセル・プルースト」である⁷⁾。この論文のなかで中野は、『源氏物語』にも見られる日本人独特の感性、時の移ろいや色彩の微妙なニュアンス、大気のわずかな変化、ほのかな音や香りといった自然の機微を敏感に捉え、それを和歌や随筆や物語で克明に表現してきた我が国の文学的伝統と、プルーストの創り出す世界との相似を細やかに説いていた。しかし本書では彼女自らが、日本人をプルーストに惹き付ける別の理由を掲げたわけである。今日の日本同様、文学のあり方が厳しく問われる緊張感のなかで、あえて創作に至るまでの模索に半生を費やした「書けない主人公」の物語、エクリチュールの問題に正面から取り組む小説が世に出ていたことの意義は大きい。

標題にプルーストという固有名を掲げてはいるものの、19世紀の社会的・文

化的状況を詳述したこの大著は、特定の作家論というよりも、むしろ時代や国を超えた優れた文学論というべきである。2013年は『スワン家の方』の百周年にあたり、さまざまな出版や行事がフランス本国を中心に相次いだ。その年の締めくくりに、知恵と教示に富んだ本書が世に出たことは慶賀にたえない。世界の研究者に先駆けて、かくも巨きな成果を識ることができた、これに勝る喜びはない。

註

- 1) Chizu NAKANO, *De «La Fugitive» à «Albertine disparue» : le destin en éclipse de l'avant dernier volume d'À la recherche du temps perdu» – évolution du roman proustien après 1914*, thèse de doctorat soutenue devant l'Université de Paris IV-Sorbonne, 1989.
- 2) Voir Bernard BRUN, [compte rendu de la thèse de Nakano CHIZU], *Bulletin Marcel Proust*, n° 40, 1990, pp. 175-176.
- 3) ジュリア・クリステヴァ 『プルースト——感じられる時』(中野知律訳), 筑摩書房, 1998年を参照。
- 4) Voir Francine GOUJON, Nathalie MAURIAC DYER et Chizu NAKANO (éd.) *Marcel Proust, Cahier 54, vol. II : Transcription diplomatique, notes et index*, Bibliothèque nationale de France / Brepols, 2008.
- 5) 中野知律 『プルーストと創造の時間』, 名古屋大学出版会, 2013年。
- 6) Voir Antoine COMPAGNON, *La Troisième République des lettres. De Flaubert à Proust*, Paris : Éd. du Seuil, 1983.
- 7) Voir Chizu NAKANO, «Marcel Proust dans le Japon actuel», *Bulletin Marcel Proust*, n° 42, 1992, pp. 136-153.